

2. 第18号集石造構出土
4. 第5号 //
7. 第12号 //
8. 第8号 //



上の原地下式古墳群発掘調査

西諸県郡須木村大字中原字上ノ原 1754 番地 1

(人骨篇)



例 言

1. 本報告は昭和55年5月20日から6月25日まで宮崎県教育委員会が実施した西諸県郡須木村上ノ原地下式古墳群発掘調査において出土した埋葬人骨にかかる報告である。
2. 人骨の調査は長崎大学医学部解剖学第二教室によって行われ、同教室講師松下孝幸、助手分部哲秋の両氏に執筆いただいた。記して感謝申し上げる。
3. なお、発掘調査の報告は、宮崎県文化財調査報告書第28集に掲載している。

宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨

松下孝幸

はじめに

宮崎県西諸県郡須木村上の原において、1980年5月に地下式古墳10基が調査され、そのうちの7基に人骨が残存しており、合計11体の人骨が得られた。

これらの人骨は別項で述べられているように、考古学的所見から古墳時代（5世紀後半から6世紀前半頃）に属するものである。

人骨の保存状態は必ずしも良いものではなかったが、頭蓋の保存は四肢骨に比べると比較的良好なものもあり、顔面の特徴などを知ることができた。当教室では地下式古墳出土人骨の人類学的研究を進めており、この上の原地下式古墳人骨もそのための貴重な資料のひとつになると思われる所以、できるだけ詳細に観察や計測を行なった。その結果を報告したい。

なお、11体のうち1体は成年骨であり、この成年骨については、別項で分部が詳しく報告しているので、本稿では成人骨についてのみ報告する。

資料

10基の地下式古墳から合計11体の人骨が出土したが、3号、5号墳および10号墳には人骨は残存しておらず、2号墳および4号墳に2体づつ、9号墳には3体の人骨が合葬してあった。

この11体の人骨の性別および年令は次のように推測される。

人骨番号	性別	年令	人骨番号	性別	年令	
1号墳1号人骨	女性	壮年	顔面朱	7号墳1号人骨	不明	熟年
2号墳1号人骨	男性	壮年	顔面朱	8号墳1号人骨	成年	
2号墳2号人骨	不明	壮年	9号墳1号人骨	男性	壮年	
4号墳1号人骨	男性	壮年	9号墳2号人骨	男性	熟年	
4号墳2号人骨	女性	壮年	9号墳3号人骨	女性	壮年	
6号墳1号人骨	女性	熟年	顔面朱			
なお11体の性別の内訳は次のとおりである。						
男性	女性	不明	幼小兒 (成年)	合計		
4	4	2	1	11		

所見

1号墳1号人骨

1号墳には1体分の人骨が残存していた。

(1) 頭蓋

1. 脊頭蓋

保存状態は良くなく、前頭鱗右側部分、右側頭骨および右頭頂骨の一部が残存していたにすぎず、計測は不可能であるが、観察したところでは諸様はやや小さく、乳様突起も小さい。

縫合は冠状縫合の右側のみしか観察できないが、この部分の内外両版の接着は全く認められない。

2. 頸面頭蓋

右の頸骨弓と左頸骨の一部を欠くほかは良く残存していた。

前頭骨は豊かに膨隆しており、眉上弓の隆起は弱く、鼻根部は扁平で、顔面の高径は低い。中額幅は9.1mm、額高は10.6mmで、上顎高はプロステオントを復元しての計測値が(5.7mm)で、ウィルヒョーの顎示数および上顎示数はそれぞれ11.64.8、(6.2.6.4)となる。

眼窩軸は4.0mm(右)、眼窓高は3.3mm(右)で、眼窓示数は8.2.5.0となり、mesokonch(中眼窓)に属している。

鼻輪は2.6mm、鼻高は4.5mmで、鼻示数は5.7.7.8となり、chamaerrhin(広鼻)に属している。

また鼻骨最小幅は7mm、前眼窓間幅は1.6mmである。

3. 下頸骨

右筋突起と左下頸角を欠損しているほかはほぼ完全である。大きさはやや小さく、右下頸枝幅は3.2mmでやや大きく、下頸切痕深は左側で1.0mmとなり、下頸切痕は著しく浅い。

4. 齒

歯は良く残存しており、すべて上顎骨および下顎骨に釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

$M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C$	$I_2 \odot$	$I_1 I_2 C$	$P_1 P_2 M_1 M_2 \otimes$	\odot 歯槽閉存 \otimes 歯槽閉鎖
$M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C$	$I_2 I_1$	$I_1 I_2 C$	$P_1 P_2 M_1 M_2 \odot$	

咬耗度はBrocaの1~2度である。

(2) 四肢骨

四肢骨および軀幹骨の残りは著しく悪く、環椎の右半分、軸椎歯突起、左鎖骨の一部、左寛骨の大半骨

痕部および左大顎骨頭が残存するだけで、大顎骨頭は小さい。

性別は頭蓋の形態から女性と推定され、年令は縫合が内板においても癒着していないことや歯の咬耗度から壮年と考えられる。

2号墳 1号人骨

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

頭蓋冠は腐朽して残存しておらず、頭蓋底のみが残存するだけなので、3主径の計測は不可能で、頭型の傾向を知ることもできないが、外後頭隆起の発達は良い。

2. 顔面頭蓋

前頭骨左眼窩部の一部および左頬骨を欠くほかは比較的残りは良い。眉上弓の隆起はやや強く、鼻根部はやや縮凹しており、顔面の高径はやや低い。

顎高は112mm、上顎高は63mmで、下顎高が著しく低い。

眼窩については右側のみが計測可能で、眼窩幅は46mm、眼窓高は34mmで、眼窓示数は73.91となり、chamaekonch(低眼窓)に属している。

鼻幅は25mm、鼻高は52mmで、鼻示数は48.08を示し、mesorrhin(中鼻)に属している。

3. 下顎骨

左側の関節突起を欠損しているほかは、完全に残存しており、諸径は大きい。

下顎角幅は103mm、下顎枝幅は左右共に40mmで大きく、下顎切痕深は16mm(左)でやや深いが、筋突起は大きい。

4. 歯

歯は良く残存しており、そのほとんどが上顎骨および下顎骨に釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M ₃ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C	I ₂	I ₁ ○ C	P ₁ ○ M ₁ M ₂ M ₃	○ 歯槽開存 ⊗ 歯槽閉鎖 ※ 歯冠のみ
⊗ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C	I ₂ ○	I ₁ ○ C	P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ M ₃	
咬耗度はBrocaの1~2度である。				

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

右肩甲骨の外側半および上腕骨が残存していた。

1. 上腕骨

右側は遠位半を除く大部分が、左側は遠位半の内側半が残存しており、右側の方の保存が良い。諸径は大きいものではなく、三角筋粗面の発達は悪い。

計測は右側のみが可能で、推定中央位での最大径は(21mm)、中央横径は(16mm)、中央周は(62mm)、中央断面示数は(76.19)である。

1) 下肢骨

腸骨翼を欠く左右の寛骨、大腿骨および脛骨が残存していた。

1. 大腿骨

右側は遠位端を欠く大部分がよく残存していたが、左側は骨体近位部の一部が残っていたにすぎない。諸径は大きいものではなく、粗線の発達も悪く、骨体上部の扁平性も認められない。

右側の計測値は推定中央位での矢状径が(27mm)、横径が(25mm)、中央周は(82mm)で、骨体中央断面示数は(108.00)となり小さく、柱状形成の像は全く認められない。また骨体上横径は28mm、骨体上矢状径は23mmで、上骨体断面示数は82.14となり、扁平性は認められない。

2. 脛骨

左側のみが残存しており、近位部と前縁を欠いている。径はあまり大きいものではなく、扁平性も認められない。

推定中央位での横径は(22mm)、最小周は70mmである。

性別は眉上弓の発達が良いことや寛骨の大坐骨切痕の角度および恥骨下角が小さいことから男性と推定され、年令は歯の咬耗が弱いことや恥骨結合面の形状から壮年と考えられる。

2号墳 2号人骨

骨片と歯が残存するだけである。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	M ₁	M ₂	M ₃
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C					P ₁		M ₁	M ₂	M ₃

すべて遊離歯で、咬耗度はBrocaの1度である。

性別は不明であるが、年令は咬耗が弱いことから壮年と推定される。

4号墳 1号人骨

保存状態はきわめて悪く、頭蓋が残存するだけである。

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

頭蓋冠が残存するだけで、最大長および最大幅を計測することはできないが、観察したところ頭型は短頭型を呈している。縫合は冠状縫合およびラムダ縫合が観察できるが、いずれも内板においても癒着は認められない。

2. 顔面頭蓋

右半分のみが残存するだけで、計測は不可能であるが、眉上弓の発達は良好で、頬骨も強く張り出している。

3. 下頸骨

下頸体が残存していたが、右側は下頸底を欠いている。径はやや大きいようである。

4. 歯

歯は比較的良く残っていた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	O	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁			
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	O	O	O	O	O	O	O	O	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

(○ 歯槽開存
・ 遊離歯)

なお咬耗度はBrocaの1~2度である。

性別は眉上弓の発達が良いことから男性と推定され、年令は縫合が内外両板とともに癒着していないことから壮年と考えられる。

4号墳2号人骨

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

前頭骨の眼窩部、鼻部を除くほかは良く残存していた。

外後頭隆起はやや良く発達しているが、乳様突起は小さく、頭頂結節の発達はきわめて良好である。

前頭部を欠くため、頭骨最大長は計測できないが、最大幅は140mmでやや大きく、観察したところでは頭型は短頭に傾いているようである。

縫合は冠状縫合、ラムダ縫合とも内外両板に癒着は全く認められない。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は残存しなかった。

3. 下頸骨

左半部が完全に残存していた。

下頸枝高は 5.9 mm (左), 下頸枝幅は 3.6 mm (左), 下頸切痕深は 1.5 mm (左) で, 下頸枝は低く, 幅は広く, 下頸切痕は浅い。

4. 齒

歯の保存は余り良くなく, ほとんどが遊離歯である。残存歯を模式で示すと次のとおりである。

$\dot{M}_3 \dot{M}_2 \dot{M}_1$	\dot{I}_2	\dot{P}_1	$\dot{M}_2 \dot{M}_3$	(・遊離歯)
$\dot{M}_2 \dot{M}_1$		$P_2 M_1 M_2 M_3$		

なお咬耗は弱く, その程度は Broca の 1 度である。

(2) 上肢骨

肩甲骨の関節窓部と左上腕骨とが残存していた。

1) 上肢骨

1. 上腕骨

左骨体のみが残存していた。

三角筋粗面は比較的良く発達しているが, 径は小さく, やや扁平である。

推定中央位での最大径は (2.0 mm), 横径は (1.5 mm) で, 骨体前面示数は (7.5.0) となり, 骨体はやや扁平である。また中央周は (6.0 mm), 最小周は 5.5 mm となり, やや細い。

2) 下肢骨

左側対応の大坐骨切痕部と左大脛骨とが残存していた。

1. 大脛骨

左骨体の遠位部が残存するだけで, その径は大きいものではない。

性別は大坐骨切痕の角度が大きいことから, 女性と推定され, 年令は縫合に癒着が全く認められることおよび歯の咬耗が弱いことから, 壮年と考えられる。

6 号墳 1 号人骨

6 号墳から出土したのは 1 体分の人骨で, その保存状態はあまり良くなかった。

(1) 頭蓋

保存状態はきわめて悪く, 脳頭蓋は左側頭骨の雑体と後頭骨左側部が残存するだけで, 頭面頭蓋は全く欠失していた。

1. 下頸骨

左半分が良く残っており、下頸幅は 3.4 mm (左) で、幅広く、下頸切歯も浅く、下頸体は低く、左側は第 2 小臼歯の歯槽までは存在するが、それより遠心側は歯槽が閉鎖し、骨萎縮も認められる。

2. 歯

残存歯は少ないが、それを歯式で示すと次のとおりである。

P ₁	I ₁	I ₂	
／＼＼＼＼	○ ○ ○	○ I ₂ ○ ○ ○	⊗ ⊗ ⊗ ⊗

歯の咬耗度は Broca の 3 度である。

- / 不明 (破損)
- 歯槽開存
- ⊗ 歯槽閉鎖
- ・ 遊離歯

1. 上肢骨

左桡骨と左尺骨とが残存していた。

1. 桡骨

左側の骨体が残存するだけであるが、骨体横径は 1.4 mm、骨体矢状径が 1.0 mm で、骨体断面数は 7.1.4.3 である。また最小周は 3.5 mm で、著しく細くて小さい。

2. 尺骨

左側の骨体中央部が残存するだけであるが、尺骨矢状径は 1.1 mm、尺骨横径は 1.4 mm で、骨体断面示数は 7.8.5.7 となり、径は小さい。骨間縫は骨体中央よりやや近位部で強く突出している。

2) 下肢骨

大腿骨と脛骨とが残存していた。

1. 大腿骨

左右共骨体が残っていた。諸径はやや小さく、粗線の充満も強いものではないが、骨体の後面がやや後方へ張り出し、横径の割りに矢状径が大きくなっているが、柱状形成という程のものではない。

推定中央位での矢状径は (2.7 mm, 右), (2.6 mm, 左), 横径は (2.2 mm, 右), (2.4 mm, 左) で、骨体中央断面示数は (12.2.7.3, 右), (10.8.3.3, 左) となり、右側がやや大きい。また中央周は (7.8 mm, 右), (8.0 mm, 左) で、骨体はやや細い。

2. 脛骨

左右共骨体中央部が残存していた。両側共表面の剥落が著しく、計測はできないが、径は大きいものではない。

性別は四肢骨の諸径が小さいことから、女性と推定され、年令は歯の咬耗が強いことから熟年と考えられる。

7号墳 1号人骨

7号墳には1体分の人骨が残っていたが、その保存状態は著しく悪いもので、歯と下肢骨とが残存するだけであった。

歯は歯根表面の腐朽が著しく、残存していた数も少ない。その残存歯を齒式で示すと次のとおりである。

\dot{M}_2	C		P_2	(・ 遊離歯)
P_1			$P_1 \quad M_1 \quad M_2$	

歯はすべて遊離歯で、咬耗度はBrocaの3度である。

四肢骨は大腿骨と脛骨の骨体が残存していたが、表面の剥落が著しく、計測や観察は不可能であり、左右の同定すらできないものであった。

性別は不明であるが、年令は歯の咬耗が著しく強いことから、熟年と推定される。

9号墳 1号人骨

9号墳には3体の人骨が残存していたが、その中で1号人骨の残りが一番悪かった。

(1) 頭蓋

頭蓋の保存状態はきわめて悪く、脳頭蓋は左右の側頭骨の顎体と後頭骨の底部が残存するだけで、顎面頭蓋も上頸骨の歯槽突起が残っているだけである。

1. 下頸骨

左右共下頸枝の一部を欠損している他は比較的保存が良い。下頸枝は幅広く、下頸切痕も浅い。

2. 歯

歯の遺存状態は良い。残存歯を齒式で示すと次のとおりである。

M_3	\dot{M}_1	C	I_2	$ I_1 \quad I_2 \quad C \quad P_1 \quad P_2 \quad \dot{M}_1 \quad \dot{M}_2 \quad \dot{M}_3$	<input type="circle"/> 歯槽開存
$M_3 \quad M_2 \quad M_1 \quad \circ$	$P_1 \quad C$	$I_2 \quad I_1$		$ I_1 \quad I_2 \quad C \quad P_1 \quad P_2 \quad M_1 \quad M_2 \quad \circ$	・ 遊離歯

咬耗は弱くBrocaの1~2度である。

(2) 四肢骨

右肩甲骨外側縁、両端を欠く左右の鎖骨、上腕骨および桡骨が残存していた。

1) 上肢骨

1. 上腕骨

左右共骨体が残存しているが、左側は表面の剥落が著しく、計測は不可能である。

右側の推定中央位での最大径は(22mm)、最小径は(17mm)で、骨体断面示数は(77.27)となり、弱い扁平性が認められ、三角筋座面の発達も比較的良好。また中央間は(6.5mm)、骨体最小周は8.2mmで、周径はあまり大きいものではない。

2. 桡骨

右側は近位部が、左側は骨体が残存しており、左側の骨体横径は(16mm)、骨体矢状径は(11mm)で、骨体断面示数は(68.75)となる。

2) 下肢骨

脛骨の一部、大腿骨、脛骨が残存していた。

1. 大腿骨

右側の骨体中央部と左側の骨体遠位半分が残っているが、左側は腐朽が著しく計測はできない。

右側は粗線の発達は比較的良好で、推定中央位での矢状径が(26mm)、横径は(24mm)で、骨体中央断面示数は(108.33)となり、柱状形成の像は示数値からも観察所見からも認められない。また中央間は(7.9mm)で、あまり大きいものではない。

2. 脛骨

右側の骨体中央部が残存していたが、腐朽が著しく、計測はできないが、その最大径は大きいようである。

性別は下顎骨や四肢骨が大きいことから、男性と推定され、年令は歯の吸収が弱いことから壮年と考えられる。

9号墳 2号人骨

頭蓋の保存状態は比較的良好が、四肢骨の残りは悪い。

(1) 頭蓋

1. 頭頂蓋

残存している頭蓋骨の量が多いが、頭頂骨および後頭骨は破片となっており、この部分を復元することは不可能であるが、前頭骨が顎面頭蓋と共に良く残存していた。

脳頭蓋のうしろ半分が欠けているので、主要径を知ることはできないが、前頭骨の形状か

らその径は大きいものである。

1. 頭面頭蓋

頭面頭蓋に比べると頭面頭蓋の保存は良く、ほとんど完全である。

眉上弓の隆起は強く、鼻根部はやや陥凹し、鼻骨は広く、顔面の幅径は著しく広い。

計測値は頬骨弓幅が 14.6 mm, 中額幅 10.4 mm, 上顎高が (6.8 mm) で、コルマンの上顎示数は (4.6.5.8), ウイルヒーの上顎示数は (6.5.3.8) となり、低・広顎の傾向が認められる。

眼窓幅は 4.5 mm (右), 4.4 mm (左), 眼窓高 3.4 mm (右), 3.5 mm (左) で、眼窓示数は 7.5.5.6 (右), 7.9.5.5 (左) となり、右側は chamaekonch (低眼窓) に属し、左側は mesokonch (中眼窓) に属している。

鼻高は 5.2 mm, 鼻幅は 3.0 mm で、鼻示数は 5.7.6.9 となり、chamaerrhin (広鼻) に属している。また鼻骨最小幅は 1.3 mm, 鼻骨最大幅は 2.3 mm で鼻骨は幅広い。

3. 歯

上顎の歯は良く残存しており、残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

$/ \quad M_2 \quad M_1 \quad P_2 \quad P_1 \quad C \quad I_2 \quad I_1 \quad \quad I_1 \quad I_2 \quad C \quad P_1 \quad P_2 \quad M_1 /$	$C \quad \quad M_1 \quad M_2$	$/ \quad$ 不明 (破損) $\cdot \quad$ 遊離歯
---	---------------------------------	--

咬耗度はやや強く、Broca の 3 度である。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

鎖骨は左右共胸骨端が残存しており、その部分の径は大きく、その他に上腕骨、桡骨が残っていた。

1. 上腕骨

右側は骨体が、左側は骨体の近位半分が残存していた。両側共三角筋粗面の発達はきわめて良好で、径も著しく大きい。

計測ができたのは右側のみで、その計測値は推定中央位における最大径が (2.5 mm), 最小径が (2.0 mm) で、骨体断面示数は (80.00) となり、扁平性は認められない。また中央周は (7.5 mm), 最小周は 7.0 mm で、周径は大きく、頑丈である。

2. 桡骨

右側のみが残存しており、近位端を欠いているが、その他の部分は良く残っていた。

径は大きく、頑丈で、骨間縫の発達も良い。

計測値は骨体横径および推定中央位での横径は共に 1.9 mm, 骨体矢状径および推定中央位での矢状径は共に 1.4 mm で、径は大きく、骨体断面示数は 7.3.6.8 となる。骨体中央周は (5.1 mm) で周径は大きい。

2) 下肢骨

左右の寛骨の大坐骨切痕部、大腿骨および脛骨の前縁部のごく一部が残存していた。

1. 大腿骨

右側骨体が残存しており、その径は大きい。粗繊の発達も良好で、骨体近位半分の矢状径は大きくなないが、遠位半分のそれは著しく大きくなり、後面は柱状形成の像を呈している。また筋膜粗面の発達は悪く、骨体上部の扁平性は認められない。

計測値は推定中央位での矢状径は (2.9 mm) 横径は (2.7 mm) で、骨体中央断面示数は (1.0.7.4.1) で、中央部における示数值はあまり大きくなない。また骨体中央周は (8.9 mm) で大きく、上骨体断面示数は 8.6.6.7 となり、扁平性は認められない。

性別は頭蓋の形態および寛骨の大坐骨切痕の角度が小さいことから、男性と推定され、年令は歯の咬耗が強いことから熟年と考えられる。

9号墳 3号人骨

保存状態は9号墳2号人骨と同様に、顔面頭蓋の保存が比較的良好く、四肢骨の残りは悪い。

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

左半分の保存が悪いので、主要径の計測はできないが、最大径はあまり大きくなく、幅径はやや大きいようで、頭型としては頸頭に傾いているようである。また3主縫合のうち観察できたのは冠状縫合と矢状縫合の一部であるが、いずれも内板における瘤合も認められない。

2. 顔面頭蓋

保存は比較的良好く、眉上弓の隆起は弱く、鼻根部は扁平で、鼻骨はやや広い。顔面の高径は低く、幅径は大きい。

計測値は中顎幅が (1.0.3 mm), 上顎高が (6.0 mm) で、ウイルヒューの上顎示数は (5.8.2.5) となり、低・広顎の傾向が著しい。

眼窩幅は (4.6 mm, 右) 4.3 mm (左), 眼窓高は 3.2 mm (右), 3.1 mm (左) で、眼窓示数は (6.9.5.7, 右), 7.2.0.9 (左) となり、両側共 Chamaekonch (低眼窓) に属している。

鼻高は 4.4 mm, 鼻骨最小幅 1.2 mm, 鼻骨最大幅は 2.0 mm で、鼻骨は広い。

3. 下頸骨

右下頸枝を除く部分が残存していたが、歯槽部の大部分は欠けていた。

径は大きいものではなく、下頸枝幅は 3.8 mm で、幅広く、下頸切痕は浅く、筋突起の発達は良好である。

4. 歯

歯は大部分が残っていたが、歯根部のセメント質の剥落は著しい。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	I ₁	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃		

[○ 歯槽開存
・ 遊離歯]

咬耗はあまり強いものではなく、Broca の 1 ~ 2 度である。

(2) 四肢骨

上腕骨と桡骨が残存していた。

1. 上腕骨

左右共骨体が残存するが、その径は小さく、三角筋粗面の発達は悪い。

計測は左側のみが可能で、推定中央位における最大径は (1.9 mm)、最小径は (1.5 mm) で、骨体断面示数は (7.8.9.5) となり、扁平性は弱い。また中央周は (5.6 mm) で、やや細い。

2. 桡骨

左右共骨体が残存しており、径は小さく、細く、骨間縫の発達も悪い。

計測は左側のみが可能で、骨体横径は 1.4 mm、骨体矢状径は 1.0 mm で、骨体断面示数は 7.1.4.3 となり、中央周は (3.7 mm) で、骨体は細くて小さい。

(2) 下肢骨

大腿骨と脛骨とが残存した。

1. 大腿骨

左右の骨体が残存しているが、その径は小さい。

右側の骨体のみが計測可能で、推定中央位での矢状径は (2.5 mm)、横径は (2.3 mm) で、骨体中央断面示数は (1.0.8.7.0) で、いわゆる柱状形成の像は認められない。また中央周は (7.6 mm) で細く、上骨体断面示数は 7.7.7.8 で、弱い扁平性が認められる。

2. 脛骨

右側は骨体が、左側は骨体前縁が残っていたが、右側骨体の保存状態は悪く、計測も観察もできる状態のものではない。

性別は頭蓋の形態や四肢骨が小さいことから、女性と推定され、年令は縫合が内板においても癒着していないことおよび歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

総括

宮崎県須木村上の原において、1980年に地下式古墳が10基調査され、そのうちの7基から合計11体の人骨が出土した。人骨の保存状態は良くなく、特に四肢骨の保存は著しく悪いが、顔面頭蓋の残りは他の部分に比べると比較的良好であった。これら11体の人骨のうち10体の成人骨について観察および計測を行なった。その結果を要約すると次のとおりである。

1. 調査された10基の地下式古墳のうち3号墳5号墳および10号墳には人骨は残っておらず、2号墳、4号墳にはそれぞれ2体が、9号墳には3体が合葬されていた。
2. 11体の人骨のうち、男性が4体、女性が4体、性別不明が2体、成年が1体で、10体の成人骨のうち、老年が2体で、との8体は壮年であり、被葬者の大部分が若い。
3. 脳頭蓋の保存状態は悪いので、頭型を示数値で知ることはできないが、観察によって頭型の傾向を知り得た3体（4号墳1号人骨、4号墳2号人骨、9号墳3号人骨）についてはいずれも短頭の傾向が認められる。
4. 顔面については、男女共に幅径は大きくて高径は低く、低・広顔の傾向が著しい。
5. 眼窩および鼻についても顔面と同様の傾向が著しく、低眼窩、広鼻に属している。また眉根部は大部分が扁平で、鼻骨も広い。
6. 下頬枝幅は幅広く、下頬切痕は浅く、筋突起は大きい。
7. 四肢骨は一般的に細く、扁平性および柱状形成の像は認められないが、男性の上腕骨の三角筋粗面の発達は比較的良い。また1例ではあるが、男性の中には四肢骨が著しく太くて頑丈なものがあった。
8. 南九州に特有な地下式古墳出土に関する内藤（1973、1974）および内藤・松下（1976）の報告によれば、地下式古墳出土人骨の頭蓋には一般に短頭性がみとめられ、顔面頭蓋は著明な低・広顔の傾向を示し、また身長は必ずしも低身長ではないといわれている。しかしながら短頭性については、均一的でなく、個体ごとに、あるいは遺跡ごとに多少の変異が認められ、今後の検討が必要とされている。

ここに報告した上の原地下式古墳出土の成人骨は、すでに述べたように、短頭性がうかがわれ、顔面は強い低・広顔の傾向を示している。頭蓋に関する限り、従来の報告と類似した形質をもつものと考えられる。

また四肢骨については、保存不良のため、推定身長の算出はできないが、骨体は一般に細く、きしゃしな傾向がみられる。ただ頭部に櫛を着用していた男性例では、四肢骨が太くて頭丸であった。四肢骨の性状は未だ不明のことがらが多く残されており、頭型の問題とともに、今後追究されねばならない重要な課題である。

(摂筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた宮崎県教育委員会文化課、須木村教育委員会、ならびにご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。)

参考文献

1. 城一郎, 1938 : 古墳時代日本人の人類学的研究。人類学報, 第1輯 : 1-437.
2. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie, Bd. I., Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
3. 松下孝幸, 1981 : 日守地下式古墳出土の人骨。宮崎県文化財調査報告書, 第23集 : 169-178.
4. 内藤芳篤, 1973 : 灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡 : 72-77.
5. 内藤芳篤, 1974 : 人骨とその埋葬方法。大森遺跡(1) : 55-62.
6. 内藤芳篤, 松下孝幸, 1976 : 南九州出土の古墳時代人骨。解剖誌, 51 : 279.
7. 佐野一, 1966 : 九州地方古墳時代人骨の研究(予報)。日本人類学会・日本民族学会連合大会第20回紀事 : 212-214.
8. 鳥五郎, 寺門之隆, 1957 : 近畿地方古墳時代人頭骨について(略報)。人類誌, 66 : 57-64.
9. 鈴木尚, 1963 : 日本人の骨。岩波書店、東京, 58-64.

表 1. 頭蓋主要計測値

(一)

	2号墳1号 (男性)	9号墳2号 (男性)	1号墳1号 (女性)	4号墳2号 (女性)	9号墳3号 (女性)
1. 頭骨最大長					178
8. 頭骨最大幅					140
17. バンドンブルグマ高					
8/1 頭骨長幅示数					
17/1 頭骨長高示数					
17/8 頭骨幅高示数					
9. 最小前頭幅		102	90		97
10. 最大前頭幅					
11. 兩耳幅	132	137	126	121	
7. 大後頭孔長	36				
16. 大後頭孔幅	33				
16/7 大後頭孔示数	91.67				
24. 横張長				301	
25. 正中矢状弧長					
43. 上顎幅		114			109
45. 煙骨弓幅		146			
46. 中顎幅		104	91		(103)
47. 顎高	112		106		
48. 上顎高	63	(68)	(57)		(60)
47/45 顎示数(K)					
48/45 上顎示数(K)		(4658)			
47/46 顎示数(V)			116.48		
48/46 上顎示数(V)		(6538)	(6264)		(5825)
50. 前眼窩高幅	17	20	16		20
44. 兩眼窩幅		105			(103)
50/44 眼窩間示数		19.05			(19.42)
51. 眼窩幅	46(右) 45(右) 44(左) 40(右)			(46)(右) 43(左)	
52. 眼窩高	34(右) 34(右) 35(左) 33(右)			32(右) 31(左)	
52/51 眼窩示数	7.891(右) 7.556(右) 7.955(左) 8.250(右)			(69.57, 右) 72.09(左)	
54. 鼻幅	25	30	26		
55. 鼻高	52	52	45		44
54/55 鼻示数	48.08	57.69	57.78		
57. 鼻骨最小幅		13	7		12
57(1) 鼻骨最大幅		23			20
57/57(1) 橫鼻骨示数		56.52			

表 2. 上腕骨主要計測値 (mm)

	2号填1号 (男性, 右)	9号填1号 (男性, 右)	9号填2号 (男性, 右)	4号填2号 (女性, 左)	9号填3号 (女性, 左)
5.	中央最大径	(21)	(22)	(25)	(20)
6.	中央最小径	(16)	(17)	(20)	(15)
7.	骨体最小周	—	62	70	55
7(a)	中央 周	(62)	(65)	(75)	(60)
6/5	骨体断面示数	(76.19)	(77.27)	(80.00)	(75.00)
					(78.95)

表 3. 桡骨主要計測値 (mm)

	9号填1号 (男性, 右)	9号填2号 (男性, 右)	6号填1号 (女性, 左)	9号填3号 (女性, 左)
3.	最 小 周	—	50	35
4.	骨体横径	16	19	14
4a.	骨体中央横径	(16)	(19)	(13)
5.	骨体矢状径	11	14	10
5a.	骨体中央矢状径	(11)	(14)	(10)
5(5)	骨体中央周	(43)	(51)	(38)
5/4	骨体断面示数	68.75	73.68	71.43
5a/4a	骨体中央断面示数	(68.75)	(73.68)	(76.92)
				(64.29)

表 4. 大腿骨主要計測値 (mm)

	2号填1号 (男性, 右)	9号填1号 (男性, 右)	9号填2号 (男性, 右)	6号填1号 (女性, 左)	9号填3号 (女性, 右)
6.	骨体中央欠矢径	(27)	(26)	(29)	(27) (26) (25)
7.	骨体中央横径	(25)	(24)	(27)	(22) (24) (23)
8.	骨体中央周	(82)	(79)	(89)	(78) (80) (76)
9.	骨体上横径	28	—	30	— — 27
10.	骨体上矢状径	23	—	26	— — 21
6/7	骨体中央断面示数	(108.00)	(108.33)	(107.41) (122.73) (108.33) (108.70)	
10/9	上骨体断面示数	82.14	—	86.67	— — 77.78



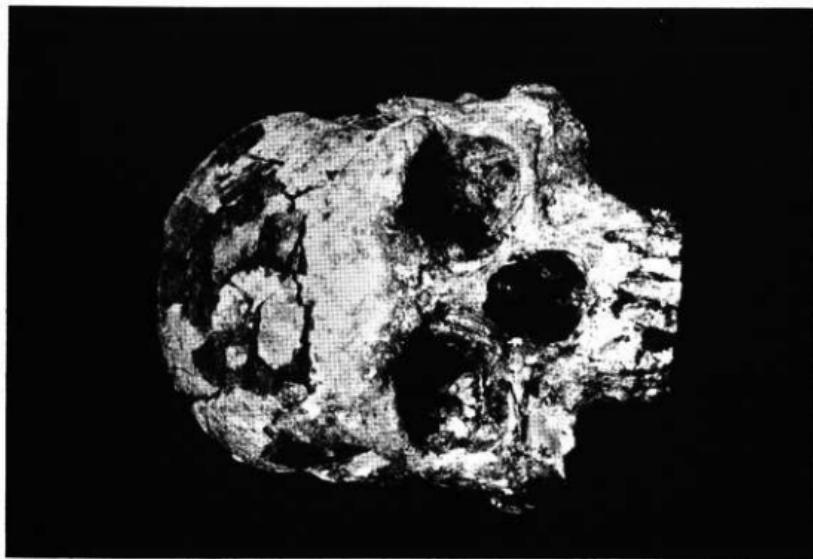
1号墓1号人骨(女性、壮年)頭蓋正面觀



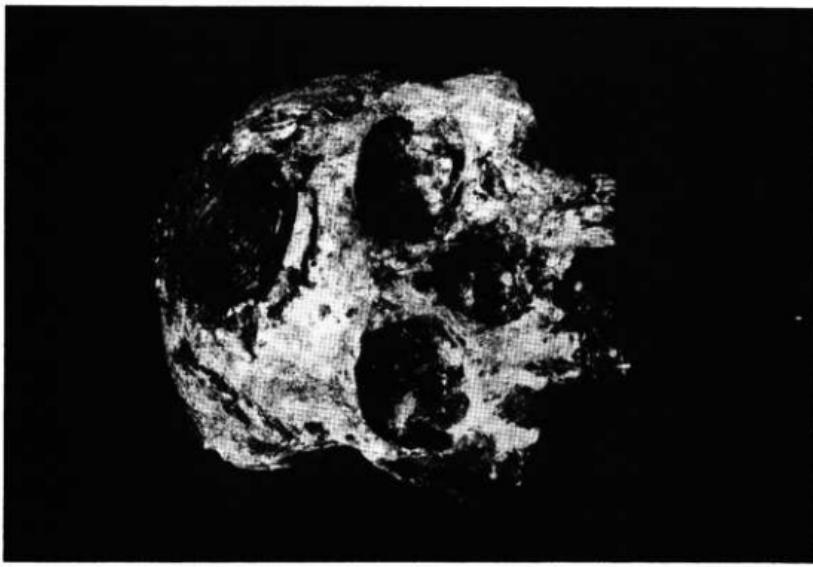
2号墓1号人骨(男性、壮年)頭蓋正面觀



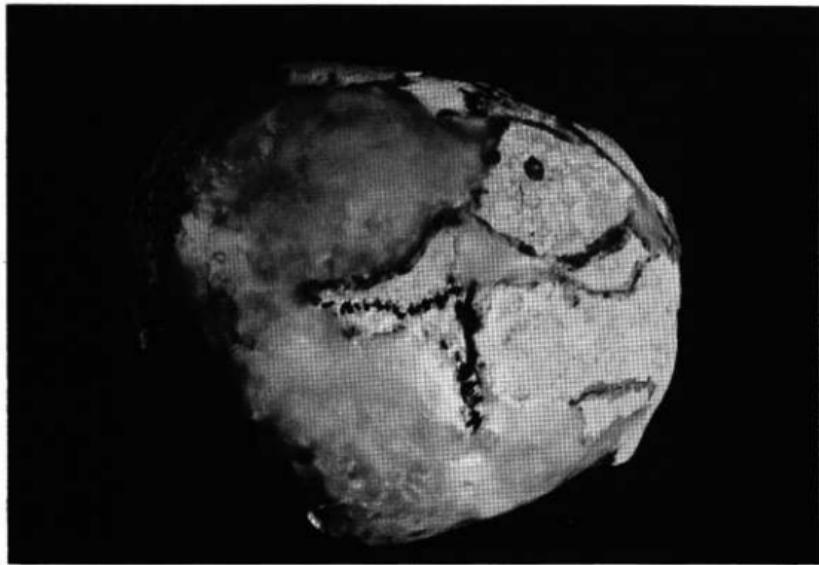
9号墳2号人骨(男性、熟年)頭蓋正面觀



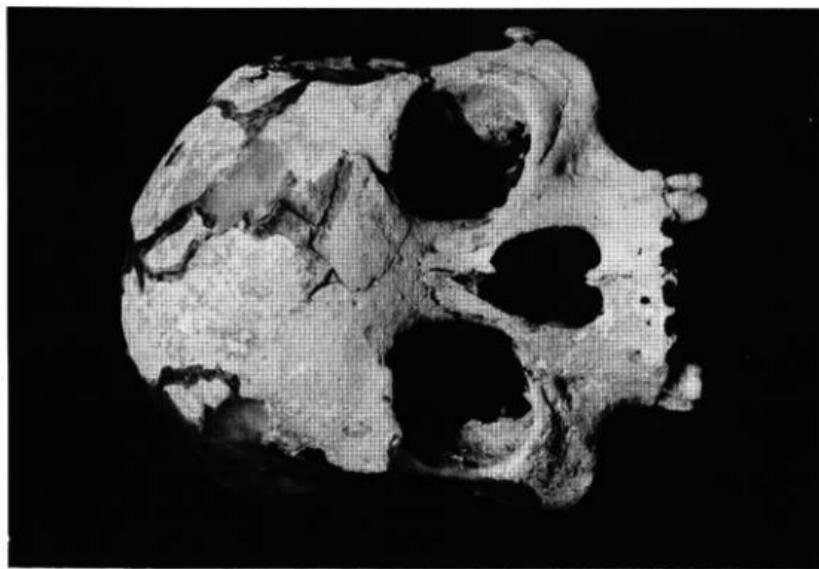
9号墳3号人骨(女性、壮年)頭蓋正面觀



8号墓1号人骨（成年）頭蓋上面觀



8号墓1号人骨（成年）頭蓋正面觀





8号墳Ⅰ号人骨（成年）四肢骨

宮崎県上原地下式古墳出土の成年骨

分部哲秋

はじめに

宮崎県西諸県郡須木村にある上原地下式古墳10基が1980年5月に調査され、合計11体の人骨が出土し、そのうち1体が成年期(*Juvenile*)の人骨であった。これらの出土人骨は別項で述べられているように、考古学所見により古墳時代に属するものである。

筆者は、各遺跡より発掘される幼小児骨および成年骨に注目し、縄文時代から、弥生・古墳時代を経て歴史時代に至る幼小児・成年の成長、化骨あるいは歯の萌出等の問題を研究するため、現在、銅意資料を収集中である。

ここに報告しようとする成年骨は、8号墳より出土したもので、保存状態も比較的よく今後の貴重な資料となると考えられる。この人骨についてできる限りの詳細な計測と観察を行なったので、その結果を報告したい。

資料

頭蓋は、右側頭部から右後頭部にかけて欠損していたが、その他はほぼ完全に残っていた。下頸骨は下頸体の外面が欠落し、下頸枝も左側のみが残っていた。

四肢骨のうち、上肢骨は上腕骨と右尺骨の釣状突起の部分が残存していた。上腕骨は、右側の骨体と左側の骨体遠位部の前面が残っていた。

下肢骨については寛骨が両側共残存し、右寛骨は腸骨翼を除く部分が、左寛骨は恥骨と腸骨翼の一部が残っていた。大腿骨は、右側が近位端の後面と遠位端を欠いているが比較的良好残り、左側は骨体のみが残存していた。脛骨は左側が骨体、右側が骨体の近位端が残っており、腓骨は右側のみが残存し、遠位端を欠くものであった。

その他、軀幹骨の一部が残っていたが、椎骨では2個の腰椎、第1仙椎および椎弓片が残存していた。肋骨は、多數の小骨片のみであった。

所 見

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

骨壁は薄く、乳様突起も小さく、また外後頭隆起の発達も弱いが、前頭骨の膨隆はみられない。

計測値は頭蓋最大長が 16.4 mm、バジオン・ブレグマ高が 12.7 mm、最小前頭幅が 9.6 mm で諸径は小さく、頭蓋長高示数は 77.44 である。最大幅は計測できないが、長径に比して幅径は大きいものようで、短頭の傾向を示しているものと推測される。

2. 顔面頭蓋

眉上弓の発達は強いものではないが、やや隆起している。鼻根部に陥凹は認められず、扁平である。

額高、頬骨弓幅は計測が不可能であったが、上顎高は 5.8 mm、中顎幅は 9.5 mm であり、幅径の割りに高径が低く、したがってウイルヒーの上顎示数は 61.05 となり、顔型としては hyperchamaeprosop (過低顎) に属している。

計測値を上の原成人骨と比較してみると、表 1 で示されているように、中顎幅、上顎高共、1 号墳 1 号人骨 (女性) よりやや大きく、その他の成人骨よりは小さいものである。また、ウイルヒーの上顎示数は、成人骨と同様に小さく、低・広顎の特徴を示すものである。

眼窩幅は 4.2 mm (左)、眼窩高は 3.3 mm (左、右) で、眼窩示数は 78.57 (左) となり、mesohonch (中眼窩) に属し、鼻幅は 2.5 mm、鼻高は 4.5 mm で、鼻示数は 55.56 を示し、chamaerrhin (広鼻) に属している。

表 1. 顔面頭蓋計測値 (mm)

	8号墳1号 (成年)	(mm)			
		1号墳1号 (女性)	2号墳1号 (男性)	9号墳2号 (男性)	9号墳3号 (女性)
		9.5	9.1	10.4	10.3
46. 中顎幅	9.5	9.1	10.4	10.3	
48. 上顎高	5.8	(5.7)	6.3	(6.8)	(6.0)
48/46 ウイルヒー氏 上顎示数	61.05	(62.64)		(65.38)	(58.25)

3. 下顎骨

下顎骨は下顎体の外面が欠落し、下顎枝も左側が残存していたが、欠損がひどく形質を知ることはできなかった。

4. 齒

歯は上顎の一部を除き残存しており、 M_2 は上顎、下顎共完全に萌出している。歯根は M_3 の他は完成しているが、 M_3 は半分しか形成されておらず、未萌出であったと推測される。

咬耗の程度は、 M_1 M_1 , M_1 が Broca の 2 度で、その他は 1 度である。 M_1 には C_1 のカリエスが認められ、 P_2 は舌側咬頭が M_1 に接しており、90 度回転している。なお、歯式は次のとおりである。

○	M_2	M_1	P_2	○	○	○	○	○	○	○	C	P_1	P_2	M_1	M_2	(M_3)
	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	※	

○ 歯槽開存
・ 逆離歯
() 未萌出
※ カリエス

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

右側は骨体が残存し、左側は遠位端の一部が残存するのみである。右側の骨体は細長く、三角筋粗面の発達は弱い。

推定中央位での計測値は、最大径が (18 mm), 最小径が (12 mm) で、横径に比して前後径が大きく、骨体断面示数は (66.67) となり示数値は小さい。また、骨体中央周は (51 mm), 最小周は 47 mm である。

これらの計測値を上の原成人骨と比較すると、男性成人骨の計測値よりもむろん小さく、女性成人骨 (2例) の平均値、最大径 (19.50 mm, 左), 最小径 (15.00 mm, 左), 最小周 55 mm (左, 1例), 中央周 (58.00 mm, 左) より小さい。

2. 尺骨

右尺骨の釣状突起の部分が残っていたにすぎない。

2) 下肢骨

1. 寛骨

右側は腸骨翼を除く部分が残存し、左側は恥骨と腸骨窩の一部が残っていた。下後腸骨縫が欠損しており、大坐骨切痕の形態は不明であるが、恥骨結合面の形態は、この人骨が非常に若いことを示している。また、寛骨臼は広くて浅く、この部分の骨化は完了している。

2. 大腿骨

左側は骨体が残存し、右側は近位端の後面と遠位端を欠いている。推定中央位での計測値は、矢状径が (22 mm, 左右), 横径が (18 mm, 右), (17 mm, 左) で、矢状径に比してやや横径が小さく、中央断面示数は (122.22, 右), (129.41, 左) となり大き

い値を示す。また、中央周は(63mm, 右), (61mm, 左), である。

最大長の計測はできないが、右側は少なくとも(380mm)を下らないことは確かで、この大腿骨はかなり細長い。

計測値を上の原成人骨女性(2例)の平均値、矢状径(2600mm, 右)、横径(2250mm, 右)、中央周(7700mm, 右)と比較すると、かなり小さい。

なお、右側の骨頭には骨端線が存在し、骨端は分離する。

3. 股骨

右側は骨体近位部、左側は骨体が残存しているが、大腿骨と同様に細い。右側の推定中央位での計測値は、最大径が(20mm)、横径が(16mm)で両径とも小さく、中央断面示数は(8000)となり扁平性は認められない。また、中央周は(58mm)、最小周は54mmで、両周径も小さい。

4. 脊骨

右側の骨体と近位端の一部が残存していたが、細く、各縁の発達は悪い。近位端には骨端面が残存し、その形状より骨体と骨端には、まだ骨化が起っていないと考えられる。

(3) 腰幹骨

肋骨片が多数と椎骨の一部が残存していた。椎骨は椎弓の形から腰椎と同定できるものが2個と第1仙椎が残っており、その他は椎弓片であった。このうち腰椎の椎体は、椎体上下面の形状から、まだ骨結合が完了していないものである。

(4) 推定年令

この人骨は、 M_2 が完全に萌出しており、Martin(1957)の M_2 萌出完了以後を成年とする年令区分により、成年骨とした。この成年骨の歯については、その他、 \overline{M}_3 を除いてすべての歯根が完成していることが特徴である。さらに、 \overline{M}_3 は歯冠および歯根の形成状態から、未萌出であると考えられる。

また、化骨に関しては頭蓋底の一部が欠損し、蝶形骨体と後頭骨底部との骨化の状態は観察できなかったが、寛骨臼においては化骨が完了し、大腿骨骨頭および股骨近位端については、化骨が完了していないことが確認できた。

現代人における化骨に関しての研究が多いが、その中で鈴木(1943)は寛骨臼の骨化を男性で16才、女性で14才、大腿骨の骨頭の骨化を16才、股骨近位端のそれを16才6ヶ月としている。また、永久歯の歯根形成に関しては、金田(1957)が M_2 の歯根形成の完了をほぼ15才としている。

仮りに、古墳時代における化骨および歯の萌出、歯根の形成が、現代人のそれらと同様であると仮定するならば、この成年骨の年令は 16 才前後と推定される。

なお、成年期ごろには、頭蓋および骨盤等に性差が現われてくるとされているが、本人骨の場合、頭蓋において著明な性差が認められず、また、大坐骨切痕部も欠損しており、性別を確定するに至らなかった。

総 括

宮崎県西諸県郡須木村にある上の原地下式古墳10基より総数11体の人骨が出土し、そのうち1体が成年期の人骨であった。この成年骨についての観察および計測の結果を要約すると次のとおりである。

1. 上の原地下式古墳出土の人骨 11 体のうち、1 体が成年期の人骨である。
2. 脳頭蓋は頭蓋最大長が 164 mm と小さいが、その割りに幅径は大きいものと推測され、頭型は短頭の傾向を示している。
3. 頤面では中顎軸が 95 mm、上顎高が 58 mm であり、ウイルヒョー氏の上顎示数は、61.05 と低い。諸径は、上の原成人骨女性 2 例の中間値を占め、頭型は成人骨と同様に低・広顎の特徴を示している。
4. 鼻根部の陥凹は認められず、扁平である。
5. 痕の吸収度は弱く、カリエスが \overline{M}_1 (C_1) に認められる。
6. 上腕骨ば細く、三角筋粗面は発達していないが、扁平性が認められる。
7. 大腿骨も上の原成人骨と比較すると、かなり細く、粗線の発達も悪い。
8. 脊柱も骨体中央部の径は小さく、扁平性は認められない。
9. この成年骨の年令は、現代人における歯の萌出、歯根の形成および化骨の時期からみて、おおむね 16 才前後と推定される。

(摘筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた宮崎県教育委員会文化課、ならびにご指導いただいた内藤芳節教授に感謝致します。)

参考文献

1. 金子丑之助, 1956 : 日本人体解剖学, 南山堂, 東京, 207-245.
2. 金田義夫, 1957 : 日本人の永久歯における歯根完成時期の研究, 歯科月報, 30, 165-172.
3. 鈴木重一, 1943 : 四肢化骨核発育に関するレ線学的研究, 千葉医会誌, 21, 349-417.
4. 藤田恒太郎, 1949 : 歯の解剖学, 金原出版, 東京, 161-164.
5. 藤田恒太郎, 1965 : 歯の話, 岩波書店, 東京, 57-98.
6. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie, Bd. I, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
7. 松下孝幸, 1981 : 宮崎県上野原地下式古墳出土の人骨, 宮崎県文化財調査報告書, 24, 114-134.
8. 森於菟, 他, 1950 : 解剖学, 金原出版, 東京, 135-146.
9. 分部哲秋, 1980 : 長崎県宮の本遺跡出土の幼小児骨, 宮の本遺跡, 110-113, 147.
10. 分部哲秋, 1981 : 鹿児島県松之尾遺跡出土の乳児・小児骨, 松之尾遺跡, 229-235.
11. 分部哲秋, 1981 : 宮崎県日守地下式古墳出土の幼児骨, 宮崎県文化財調査報告書, 23, 179-184.

(付)

昭和56年度 埋蔵文化財発掘調査一覧

(昭56.2～昭56.9)

番号	遺跡名	所在地	発 掘 調 査 日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
1	大塚地下式古墳 37号	野尻町大字三ヶ野 山 大塚	56.2.9 ～ 210	野尻町 教 委	茂山 譲	剣、鉄鎌、須 先、須恵器	
2	鎧 遺 跡	新富町大字三納代 2173-1	56.2.13 ～ 328	新富町 教 委	石川恒太郎 面高 哲郎	住居跡、V字籌 円墳、弥生土器 縄文土器、石器 須恵器、土師器	
3	舞野 遺 跡	延岡市舞野町 1469-11	56.2.25 ～ 33	延岡市 教 委	石川恒太郎	弥生土器 土師器、石斧	
4	東平下 遺 跡	川南町大字川南東 平下19035	56.3.2 ～ 314	川南町 教 委	日高 正晴	方形周溝墓 弥生土器	
5	杏袋 烟 遺 跡	川南町大字川南字 杏袋烟 5199-212-2	56.3.2 ～ 35	川南町 教 委	日高 正晴	弥生土器、石器	
6	中尾 遺 跡	高鍋町大字持出字 中尾1991-1	56.3.2 ～ 515	高鍋町 教 委	北郷 泰道	住居跡、弥生土 器、縄文土器	
7	日守地下式古墳群	高原町大字後川内 1-118	56.3.9 ～ 318	県教委	石川恒太郎 岩永 哲夫	土師器、剣 鉄鎌	本報告
8	高田原地下式古墳	国富町大字深年字 高田原 5751	56.4.30 ～ 5.8	国富町 教 委	菅付 面高 北郷 泰道	和樹 哲郎 直刀 2、鉄鎌 3、 須恵器(瓦)1	
9	桃木煙地下式古墳	国富町大字八代 北俣字桃木烟 32732	56.4.30 ～ 5.8	*	日高 正晴	鏡 1 鉄鎌 十数本、 剣 1、刀子 1	

番号	遺跡名	所在地	発 掘 調 査 日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
10	水山古墳	木城町大字高城 3528-1	56.5.18 ~ 6.11	木城町 教 委	永友 良典 山中 悅雄 岩永 哲夫 脇付 和樹	横穴式石室 須恵器、土師器 玉類、鉄器 縄文土器	
11	内野々 第1, 2遺跡	宮崎市大字北川内 字内野々	56.7.15 ~ 9.5	宮崎市 教 委	野間 重孝 菅村 和樹	縄文土器、弥生 土器、上釉器 須恵器、石器	
12	内尾敷地下式古墳 第56-1号	綾町大字南俣字 内尾敷 2610	56.7.17 ~ 7.20	綾町 教 委	面高 哲郎 長津 宗重	直刀 2, 刀子 1, 鉄鎌約 20, 櫛 1, 弥生土器	本報告
13	学園都市遺跡 16号地他	宮崎市大字熊野	56.7.20 ~	県教委	県文化課		
14	藤掛遺跡	新富町大字日置 3616-25	56.8.27 ~ 9.17	新富町 教 委	岩永 哲夫	住居跡、溝 土師器、須恵器	
15	源六原地下式古墳	阿富町大字北俣字 源六野 3703-34	56.8.31 ~ 9.1	阿富汗 教 委	茂山 遼	鉄鎌、刀子 1, 須恵器 4	
16	大瀬町地下式古墳	宮崎市大字大瀬町 1774-2の隣接地	56.9.15 ~ 9.21	宮崎市 教 委	野間 重孝	刀子 1	

宮崎県文化財調査報告書
第 24 集

昭和56年12月10日

発行 宮崎県教育委員会

編集 宮崎県教育庁文化課